# 令和7年度　一般選抜入学試験（後期）

## 小　論　文

**注　意　事　項**

1　試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2　この問題冊子は表紙を含めないで5ページあります。解答用紙は3枚です。
下書き用紙は1枚あります。
試験中に、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。

3　試験開始の合図があったら、まず、すべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入してください。

4　解答はすべて解答用紙のそれぞれの解答欄に記入してください。

5　試験時間は90分です。

6　解答用紙は記入の有無にかかわらず、持ち帰ってはいけません。

7　この問題冊子と下書き用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

なにはともあれ、次の問題を考えて下さい。まちがった答えを出しても決して恥しくありません。何しろ、アメリカの大学生でも、約四割はまちがえるのですから。

①大学教授問題

この大学では、学生六人に対して教授がひとりおります。学生の数をS、教授の数をPとし、SとPの関係を式であらわしなさい。

（中略）

②ケーキ屋さん問題

このケーキ屋さんでは、チーズケーキ五個売れるごとに、アップルパイが三個売れます。チーズケーキの売れる数をCとし、アップルパイの売れる数をAとして、CとAの関係を式であらわして下さい。

（中略）

わかっている人というのは、与えられた課題を与えられたものとみなさないで、自分自身で「わかるべきこと」を設定し直すことができるのです。自分自身で設定し直した目標を達成していく過程で、当面の課題状況にふくまれる制約条件、生じうる可能性、因果関係、目標手段関係などに注意を向けるのです。その結果、「わかる」のは、単に問題文で問われていることの答えだけではありません。課題状況がふくむあらゆる事態に対する対応が、「そういう場合は当然こうでなければならない」という必然的関係として見えてくるのでしょう。

それに対して、「わかっていない人」というのはどうでしょうか。

「わかっていない人」というのは、与えられた課題の中では何もかも与えられているとし、何も変えてはならず、問題として直接求められていること以外は何も求めてはいけないと思い込んでしまうのです。したがって、答えを出すというのは、そういう世界の中での「正しい求め方」というものに正しく従って出すということ以外にありえないと思っているのです。正答を出すのは一種の儀式であり、セレモニーなのです。結婚式を「とどこおりなくとり行う」のと同じように、正解を「とどこおりなく算出する」儀式があり、それに従えばよく、それに従わねばダメだと信じているのです。（「正しい儀式」では、一挙手一投足がきまっていて、変なドジをふんではいけない。正しいやり方をすべて記憶していないならば、はじめから手をつけない方がよいのです。）したがって、「こういう問題

はどう解くのだったかな？」ということを思い出そうとばかりするので、ごくあたりまえのことが、さっぱりわからないというしだいです。

私たちの心の中にあるべき「わかろうとする力」がまったく眠っており、「おぼえようとする力」や、「思い出そうとする力」のみが活動してしまっているのではないでしょうか。

こう考えてきますと、「わかっていない人」を「わかっている人」に変えるにはどうすればよいかについても、少しは示唆が得られるのではないでしょうか。つまり、世界を常に変形可能なものとしてとらえ、さまざまな自分なりの目標を仮想的に設定して、事態を変形し、新しい可能性をさぐり出すのです。

（中略）

世界に対し、何か自分からやってみようとすること、つまり、「やる意思」が、ものの見え方を変えるのです。昔から、「為すことによって学ぶ」といいますが、むしろ、「為そうとすることによってわかる」といってもよいのではないでしょうか。つまり、ただ漫然と与えられた行為を「為す」ということが理解を導くと考えるよりも、いろいろなことを為すことが当然と思わしめる状況を頭の中で具体的に描き出してみることが大切です。つまり、「ごく自然に為そうとする気になる状況」の設定です。私たちが一番生き生きと考え、よくわかる状況とはそういうものでしょう。ものごとがよくわかっている人というのは、一見、見なれない問題状況でも、自分がいろいろと「為さんとする気」の起る状況に読みかえたり、問題文にない人物を想定してその人は何ができるかを自由に考えているのではないでしょうか。

（中略）

今日、少なくともわが国では、すべての子どもは学校へ行くことになっています。すべての親は子どもを学校へ行かせなければなりません。

学校へ行かないとどうなるでしょうか。法律により罰せられます。また、「学歴」がないので、一人前の社会人として働くことは大変難しくなります。学校で教わる「知識」がないと、社会生活を円滑に営むことができません。私たちの社会は、一応は、文字が読めること、字が書けること、簡単な計算ができること、その他、学校で教えられる「基礎的な技能」を、すべての人が身につけているという前提の上で成り立っているのです。ですから、学校体制から脱落することは、多くの場合社会から脱落することになってしまうのです。逆に学校で成功を納めることは、社会で成功を納めるための第一歩と考えられやすいのです。

このように、今日の社会では、学校は一般社会人のもつべき知識や技能を習得させ、「学歴」を与え、その「学歴」に応じて、社会的地位を保障するというしくみになってい

るのです。学校と一般社会とは、もちつもたれつの関係にあります。「良い学校を出ている」という卒業証書で、高い社会的地位を与えますので、人びとは「良い学校」へ殺到しますし、社会も、「良い学校を出た人たち」が多くなれば、高度の知識や技能を「前提」にして社会をより効率的に管理運営していけるわけですから、学校も社会も、良いことばかりで、文句のつけどころのない話のように見うけられます。

このように、すべての人は学校へ行くべきだと定めることによって、社会は「学歴」を前提とせざるを得なくなりました。その結果、「学校」というところは、「学歴」を与えるという一種の「社会的要請」に応える役目をもつとみなされるのです。また、学校で教えることは、社会が「前提」とみなしてよいような、「万人共通の、標準的な知識や技能」であり、これらの確実な伝達こそが、学校の最大の役割ということになります。

こうなると、学校とは「標準的な知識や技能を確実に伝達するところ」ということになります。このような学校観を最も効果的に支える考え方は、「他人と同じでなければならない」という同質性への志向です。

「うちの子だけがとり残されてはいけない。」

「みんなと同じことができなければいけない。」

「変ったことをやってはいけない。」

「うちの学校だけが特別視されないように。」

「どこでもやってることならしてよい。」

という調子で、みんなが「とり残され恐怖症」にかかってしまいます。

不思議なことに、本来、同質性への志向が根底になっているはずの「とり残され恐怖症」は、結果的には、激烈な競争社会を生み出します。それは、「とり残されるよりは先へ行きたい」という、安全を求める自然な欲求と、「どこかが自分たちより〝高い水準〟を当然の前提にしていると大変だ」というおそれからでしょう。

このような世の中の体制が確立してしまいますと、学校で知識や技能を教える人も、学校でそれらを学習する子どもたちも、また、子どもを学校へ送り込む親たちも、学校を卒業して出てくる人を待ちかまえている社会の人たちも、みなが望むことは「標準的知識や技能の確実な伝達」ということになります。そこで、学校内では、標準的知識や技能がどこまで伝達され得たかを調べるため、子どもの達成度を常に測定し、評価することが中心的な作業ということになり、子どもは常に達成を問題にされ、評価を気にして、よりよく伝達をされるようにと努力するようになるでしょう。

考えてみますと、標準的な知識や技能の伝達を目的とし、子どもにそれを達成させ、評価するという学校の役割というのは、大きな工場の役割と似ています。標準製品を効率よく大量に生産し、その製品をもっていることを「常識」にしてしまうことによってその製

品への需要を高め、同じような製品をますます多く出まわらせることで生産を維持していくのですから。

ところで、教育という人間の営みは、本来こういう姿だったのでしょうか。教育技術というのは、このような知識の大量生産技術にすぎなかったのでしょうか。もう少し別の見方はないものでしょうか。

人間は自分たちの生活を「よりよくしたい」とねがっています。そのために、

㈠　「よい」とは本来どういうことなのかをさぐり（価値の発見）、

㈡　「よい」とする価値を共有しようとし（価値の共有）、

㈢　「よい」とされるものごとをつくり出し（価値の生産）、

㈣　「よい」とされるものごとを多く残したり広めたりする技術を開発します（価値の普及）。

このような人間の営みによって生み出されるものごとを「文化」とよび、㈠㈡㈢㈣のような人間の活動を「文化的実践」とよびましょう。

このような価値の発見、共有、生産、普及の活動の前提として、私は人びとの「わかる」という活動をとりあげたいと思います。

つまり、「わかる」ということは、本来、「よいもの」を「よい」と判断すること、「よい」とするさまざまなものごとを「よい」として認めあい、わかちあうこと、また、「よい」とされるものごとを生み出したり、普及させたりするために必要な手続きを明らかにし、その技能を身につけることと考えるのです。これらすべての営みは、「わかる」ということが前提になっています。つまり、人間は常に、「わかる」ということを通して、文化的実践活動に従事しているのです。

（佐伯胖　『「わかる」ということの意味［新版］子どもと教育』　岩波書店）
＊ただし、本文の一部を省略しています。

問一　傍線部①、傍線部②に示されている問題の解答と、なぜそのように考えたかについて、各々一〇〇字以内で説明しなさい。

問二　著者は波線部のような考えによってどのようなことが起こると考えているでしょうか。具体的な例を挙げながら、本文に即して二〇〇字以内で説明しなさい。

問三　あなたはこれからどのような「学び」をしようと考えていますか。本文中で説明されている「わかる」について、著者の考えを踏まえながら、あなたの考えを四五〇字以内で説明しなさい。